



Osaka Gakuin University Repository

Title	国際人・岡倉天心 —その国際人としての系譜— Cosmopolitan Tenshin Okakura — His Development as a Citizen of the World —
Author(s)	白井 元康 (SHIRAI MOTOYASU)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 23 巻第 1 号 : 19-37
Issue Date	2012.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

国際人・岡倉天心
—その国際人としての系譜—

白井元康

Cosmopolitan Tenshin Okakura
—His Development as a Citizen of the World—

SHIRAI MOTOYASU

ABSTRACT

In the early part of Japan's contemporary history, cosmopolitan Japanese were full of vigor and the frontier spirit. At the same time, they were strongly proud to be Japanese, and they were eager to introduce Japanese culture to the world. Examples of literary works that were originally written in English and intended for a foreign audience were Inazo Nitobe's *Bushido: The Soul of Japan, An Exposition of Japanese Thought*, and three works by Tenshin Okakura: *The Ideals of the east — with special reference to the art of Japan*; *The Awakening of Japan*; and *The Book of Tea*. These works were so well received that they were translated into many different languages, and eventually into Japanese.

How did these cosmopolitan Japanese cultivate their international mindset and become active in the wider global stage? Since the days of Nitobe and Okakura, today's Japanese society has become increasingly international. How can the current generation of young Japanese, following in the footsteps of the great Japanese cosmopolitans, develop themselves mentally and spiritually into individuals of practical ability with the broad

vision necessary to succeed in today's globally-oriented environment? To answer this question, it is necessary to trace the origins of Japanese cosmopolitanism back to Nitobe, Okakura, and their contemporaries. In this paper, I will focus on Okakura and his development as a citizen of the world.

はじめに

樋口一葉の新札が登場するまで、旧五千円札¹⁾でお馴染であった新渡戸稲造(1862-1933)は、国際連盟事務局次長として世界各地を舞台にして流暢な英語で国連精神を広める講演をおこなった。またユネスコの前身となった国際連盟協力的協力国際委員会の創設のため、ベルクソン(Henri-Louis Bergson, 1859-1941)²⁾、アインシュタイン(Albert Einstein, 1879-1955)、キュリー(Maria Sklodowsk-Curie, 1867-1934)夫人、マレー(Gilbert Murray, 1866-1957)³⁾らと議論を戦わせるほどの国際人であった。新渡戸は洋装の似合う風格あるジェントルマンというイメージが強い。新渡戸と生まれ年も同じである岡倉天心(1862-1913)⁴⁾は、彼とは対照的に海外にいるときは意識して羽織・袴で通した。これには深い信念のようなものが天心にはあった。アメリカ人と対等に堂々と英語で話せるという自信とともに、日本の高い精神文化を正しく伝えることができるという自負心のようなものから、自分は日本人であるという強い姿勢を貫いたのであった。したがって、語学力がまだその域にまで達していない者には、天心は海外での和服の着用をすすめなかった。彼は四十歳そこそこでポストン美術館東洋部顧問に就任し、東洋美術に関するすべてのことを任されていた。セントルイス万国博覧会では、「絵画における近代的諸問題」というテーマで堂々と講演をし、欧米各地でも講演を依頼され好評を博した。天心も新渡戸に劣らず、世界を舞台にして活躍した国際人である。天心の

-
- 1) 新渡戸稲造の五千円札は1984年(昭和59年)11月1日から使用されたが、2004年(平成16年)11月1日には現在の樋口一葉(1872-1896)のものに変わった。
 - 2) アンリ=ルイ・ベルクソン(Henri-Louis Bergson, 1859-1941)。20世紀のフランスを代表する哲学者。1928年にはノーベル文学賞を受賞した。代表的著作として『物質と記憶』(1896年)、『創造的進化』(1907年)、『道徳と宗教の二源泉』(1932年)などがある。
 - 3) ギルバート・マレー(Gilbert Murray, 1866-1957)。オーストリア生まれのイギリス古典学者、長年オックスフォード大学の教授をつとめた。代表的著作として『ギリシア宗教の五段階』(1925年)、『エウリピデスとその時代』(1913年)などがある。
 - 4) 幼名は角蔵、のち1875年(明治8年)に覚三と改める。天心は筆名。本稿では一般に知られている天心を用いる。

ボストン時代の生活の一端から、天心の語学力および、我こそは日本人であるという強い自負心を如実に示す、次のような興味深いエピソード⁵⁾が伝わっている。

天心は弟子の横山大観らと羽織・袴でボストンの街を歩いていた。まだ東洋人が珍しい時代のことである。このような姿でボストンの街を闊歩していたら、注目の的になるのは必然であろう。一人の若者が声をかけてきた。‘What sort of ’nese are you people ? Are you Chinese, or Japanese, or Javanese ? ’「おまえたちは何ニーズだ？ チャイニーズか、ジャパニーズか、それともジャヴァニーズ〈ジャワ人〉か。」

天心はこのような言葉を投げかけられると、間髪をいれずその若者に向かって、次のように応えたのである。‘We are *Japanese gentlemen*. But what kind of ’key are you ? Are you a Yankee, or a donkey, or a monkey ? ’「我々は日本人紳士だよ。ところで、あんたこそ何キーなんだい？ ヤンキーか、ドンキー〈ろば、馬鹿者〉か、それともモンキーか。」、と応えたという。

このやり取りの一部始終を見ていた横山大観は、恩師の所作によほど胸のすく思いをしたのだろう。後年このエピソードを好んで語ったと伝えられている。

1、近代日本の国際人たち

幕末に生まれ、近代日本において日本のみならず、世界的にも名を知られ、国際的に活躍した人たちを生年月日順に列挙すると、新島襄（1843-1890）、内村鑑三（1861-1930）、森鷗外（1862年2月17日-1922）、新渡戸稲造（1862年8月8日-1933）、岡倉天心（1862年12月26日-1913）ということになる。彼らはいずれも語学が堪能で、文字通り世界を股にかけて

5) 斎藤兆史『英語達人列伝 あっばれ、日本人の英語』（中央公論新社、2000年5月）、39-40頁参照。イタリック体、ゴシック体は筆者。

活躍した国際人たちであった。岡倉天心を除いて他の4人はいずれも留学経験者である。これら5人の国際人のうち、森、新渡戸、岡倉に注目したい。彼ら3人はいずれも1862年の生まれで、今の教育制度でいえば岡倉と新渡戸は同級生で、2月生まれ、森は早生まれの1学年上級生ということになろう。しかし、幕末から明治の初年にかけて成長した彼らの時代には、今日のような教育制度はまだ確立されていなかった。ようやく1872年(明治5年)に「学制」⁶⁾が頒布されたが、実施に移されるまでにはさらに時間がかかった。岡倉天心たちの時代は子どもがある程度成長すれば、各家庭の事情で寺子屋や私塾のようなところに通わせた。そのため同じ年齢になって同時に入塾するという状況は当時にはまだなかった。しかし、上記3人の国際人たちの幼少期は、いずれも経済的な心配もなく教育的環境にも恵まれていた。その結果、彼らはほぼ同時期に初等教育を受けている。この3人のうち森鴎外だけは、外国語教育として英語でなく幼少期にドイツ語教育を受けている。彼もほかの二人同様、若くして海外を舞台にして活躍をしている。すなわち彼は22歳のとき陸軍省派遣留学生として初めてドイツへ渡り、ドイツに着いた瞬間から、ドイツ人と対等以上に議論をし、講演活動もおこなっている。鴎外のドイツ留学中に次のような出来事があった。ドイツ有数の文化都市ドレスデンで、「日本」と題するドイツ人学者の講演会に、たまたま出席したことがあった。講演者は10年間もお雇い外国人教師として日本に滞在した経験のあるナウマン(Heinrich Edmund Naumann, 1854-1927)教授⁷⁾であった。彼は東京帝国大学地質学

6) 以下は『教育学全集、近代教育史』第3巻(小学館、1968年2月)のうち小松周吉「国民教育制度の発足」36頁からの引用: 廃藩置県直後の一八七一年(明治4年)七月設置された文部省は、翌年八月財政の裏づけのないままに、「学制」を頒布し、統一的な国民教育制度を発足させた。その構想は、全国を八大学区に分け、各大学区に一大学を置き(計八校)、さらに各大学区を三二の中学区に分け、各中学区に一中学校を設け(計二五六校)、各中学区を二一〇の小学区に分け、各小学区に一小学校を置く(計五三、七六〇校)。これは、初等、中等、高等の三階梯の学校制度を学区制により全国統一的に実施しようとするものであった。

7) 「ナウマンジウ」という名前は日本では広くよく知られている。その名前の由来は、化石、標本の草分け的研究をおこなったナウマン教授の功績に因んで命名された。わが国では明治時代初期に横須賀で発見されたものが有名である。森林太郎『鴎外選集』第21巻(岩波書店、1980年7月)、74-76頁参照。

教室の初代教授として、明治政府から招聘された経歴の持ち主であった。ところが、ナウマンの日本に対する認識不足を露呈する講演内容に大きな怒りを覚えた鷗外は、臆することなくナウマン教授に抗議した。その講演会のおわりになって飛び入り参加をしたにもかかわらず、鷗外の堂々としたドイツ語の演説は、多くの出席者たちから賛同を得たほどであった。因みにナウマン教授は当時32歳で、鷗外は1カ月前に24歳になったばかりであった。鷗外はこれだけでは満足せず後日、ナウマン教授に対する駁論をドイツの一流紙⁸⁾に掲載したのであった。

このように近代日本における国際人はフロンティア精神が旺盛であったが、同時にいずれも日本人としての自負心も強く、日本の精神文化を海外に伝えることに熱心であった。新渡戸稲造には*Bushido: The Soul of Japan, An Exposition of Japanese Thought* (『武士道』)の著書があり、岡倉天心には*The Ideals of the East-with Special Reference to the Art of Japan* (『東洋の理想』)、*The Awakening of Japan* (『日本の目覚め』)、*The Book of Tea* (『茶の本』)がある。これらの本は最初から海外の人たちを対象に英語で書かれたものである。いずれも好評で複数の国の言語に翻訳されたうえ、日本語にも訳されている。

フロンティア精神旺盛だった近代日本の国際人たちは、いかにして国際性を涵養し、世界を舞台に活躍できるようになったのだろうか。今日すでに国際化が大きく進んでいるさなか、次代を担う学生たちはいかにしたらこの偉大な先人たちの残した精神的遺産を継承し、視野の広い実践的な国際人になれるのだろうか。そのような意味でも、新渡戸稲造、岡倉天心たち、いわゆる近代日本の国際人たちの系譜をたどることは意義深いことであろう。本稿では岡倉天心を採りあげ、その国際人としての系譜を考察する。

8) 1886年(明治19年)12月29日、『アルゲマイネ・ツァイトゥング (Allgemeine Zeitung)』に掲載された。

2、岡倉天心略年譜

国際人・岡倉天心の系譜をたどるには、初めに彼の全生涯の年譜をみておく必要がある⁹⁾。

- | | |
|----------------------|---|
| 文久2 (1862)
12月26日 | 岡倉勘右衛門の次男として横浜に生まれる。幼名・角蔵。(0歳) |
| 明治2 (1869) | このころジェイムズ・バラーに英語を習い始める。(7歳) |
| 明治4 (1871) | 父・勘右衛門、三度目の結婚。角蔵は長延寺に預けられ、漢籍を学ぶと同時に、伊勢山下の高島学校に通う。(9歳) |
| 明治6 (1873) | 家族と東京に移転。東京外国語学校入学。(11歳) |
| 明治8 (1875) | 東京開成学校に入学。(13歳) |
| 明治9 (1876) | このころ、名を覚三と改める。(14歳) |
| 明治10 (1877) | 東京開成学校は東京大学と改称。(15歳) |
| 明治11 (1878) | フェノロサの来日。(16歳) |
| 明治12 (1879) | 大岡定雄の娘・基子(13歳)と結婚。(17歳) |
| 明治13 (1880) | 東京大学卒業。文部省音楽取調掛に勤務。(18歳) |
| 明治14 (1881) | 長男・一雄生まれる。(19歳) |
| 明治15 (1882) | 九鬼隆一文部少輔の学事巡視に随行して古社寺を巡歴。(20歳) |
| 明治17 (1884) | 長女・高麗子生まれる。フェノロサらと古社寺を拝す。(22歳) |

9) 略年譜を作成するにあたり、前掲の斎藤兆史の著作のほか、斎藤隆三『岡倉天心』(吉川弘文館、1986年6月)などを参照した。

- 明治19 (1886) 文部省図画取調掛主幹となる。欧米出張を命じられる。(24歳)
- 明治20 (1887) 欧米出張を終えて帰国。東京美術学校幹事に任じられる。(25歳)
- 明治23 (1890) 東京美術学校校長となる。(28歳)
- 明治31 (1898) 東京美術学校辞職を命じられる。日本美術院創立。(36歳)
- 明治34 (1901) 突然インドに旅立つ。(39歳)
- 明治35 (1902) タゴールと親交を結ぶ。『東洋の目覚め』草稿執筆。(40歳)
- 明治36 (1903) 『東洋の理想』ロンドンで出版。(41歳)
- 明治37 (1904) 横山大観らと渡米。ボストン美術館東洋部顧問に就任。『日本の目覚め』ニューヨークで出版。(42歳)
- 明治38 (1905) ボストンで年六ヶ月の勤務契約。日本と米国での二重生活が始まる。(43歳)
- 明治39 (1906) 『茶の本』ニューヨークで出版。(44歳)
- 明治41 (1908) フェノロサ死去。(46歳)
- 明治43 (1910) 東京帝国大学で「泰東巧芸史」を開講。(48歳)
- 大正元 (1912) インド旅行。プリヤムヴァダ・デーヴィ女史と出会う。(50歳)
- 大正2 (1913) 詩劇『白狐』を完成させ、ガードナー夫人に献呈。9月2日逝去。(51歳)

この天心の略年譜を通覧して、あわせて新渡戸稲造の年譜をみると、何か所か共通の箇所がある。新渡戸は明治4年、叔父太田時敏の養子となり、上京して太田姓を名乗るようになる。そして、この頃から私立の英語

学校で英語を学ぶようになった。天心に遅れること2年である。明治6年には天心と同じ年に東京外国語学校に入学している。その後、新渡戸は明治10年に創設されたばかりの札幌農学校に第二期生として入学している。明治14年に札幌農学校を卒業し開拓使御用掛を拜命している。その後、新渡戸は考えるところがあって、明治16年、東京大学に入学して英文学、理財、統計を修めたが、翌年には退学して渡米し、ジョンズ・ホプキンス大学に入学している。さらに明治20年にはドイツ・ボン大学で農政学、農業経済学を修めている。明治32年、*Bushido, the Soul of Japan* を米国で出版した。明治34年、台湾総督府技師となったあと、明治36年には京都帝国大学法科大学教授、明治39年は第一高等学校校長、明治42年には東京帝国大学法科大学教授を兼任。大正7年に東京女子大学初代学長。大正9年に国際連盟事務局次長となっている。

新渡戸と岡倉は同年齢であるというだけでなく、同時代の国際人としても共通するものが多い。両者とも英語に堪能なことはよく知られているところだが、幼いころに英語のみならず岡倉は国語・漢籍教育のために長延寺に預けられ、住職玄導和尚によって『論語』『孟子』など漢学をみっちり叩き込まれた。新渡戸も彼の置かれた環境¹⁰⁾から幼い日に国語・漢籍の教育を受けていたことがうかがえる。また森鷗外も、4歳にして藩の儒学者米原綱善より四書五経の素読を受け、5歳には藩校「養老館」に入り漢学を学んでいた。これらのことから分かるとおり、近代日本の国際人たちはいずれも外国語の力のみならず、国語・漢籍の力も十分な素養があった。

3、フェノロサとの運命的な出会い

岡倉天心の国際人としての系譜をたどるとき、「お雇い外国人」あるいは「お雇い外国人教師」とも言うべきフェノロサ (Ernest Francisco

10) 新渡戸は南部藩士の三男として誕生した。幼少期の新渡戸は上京して英語を学ぶ前に、藩士の家の子として当然のことながら南部藩校「作人館」にはいって、国語・漢籍の教育を受けた。この藩校で学んだことがのちになって、『武士道』を書く基盤になったと思われる。

Fenolosa、1853-1908) との出会いが大きく影響している。天心がフェノロサと初めて出会ったのは、明治11年フェノロサが東京大学教授として招かれてきてからあとのことであった。天心はその頃、まだ学生であった。しかし、学生時代の天心はフェノロサから日本美術に関する指導はいっさい受けていない。それはフェノロサの方に日本美術に関する知識が不足していたからであった。来日当時の彼は大学では、専ら哲学史、理財学、政治学などを講義していた¹¹⁾。ところで、わが国では岡倉天心といえば、東京美術学校校長やボストン美術館の顧問も務めた経験のある美術専門家でおっている。いま手元にある『国語大辞典』の岡倉天心の項でも次のように出ている。「美術評論家。本名覚三。フェノロサに師事。東京美術学校の創設に務め校長となる。のち横山大観、下村観山らと日本美術院を創立。国粹美術の興隆に指導的役割を果たす。著『東洋の理想』『茶の本』(1862-1913)」¹²⁾とある。天心の伝記を通読せず、いきなりこの大辞典の彼の項目だけを読めば、おそらく多くの人たちは、学生時代の天心がフェノロサ教授から美術に関する教育を受けたかのように想像するだろう。天心がフェノロサに師事したことは事実であるが、美術教育に関することは事実ではない。これには説明が必要であろう。天心とフェノロサとのその関係を説明することは、結果的には天心の美術評論家としての萌芽と彼の国際性涵養の過程という重要な核心を語ることになるだろう。

したがって、その核心に迫るためにも天心とフェノロサとの最初の出会いに戻ることしよう。お雇い外国人教師としてフェノロサは、1878年8月、すでに東京大学の教授をしていたモース (Edward Sylvester Morse, 1838-1925)¹³⁾ の紹介で美術でなく哲学の教授として迎えられた。「こうしてかれは、1886年(明治19年)まで大学で講義し、アメリカ生まれでありながら、わが国に初めてドイツ哲学を移植し、明治10年前後までわが国に

11) 木下長宏『岡倉天心』(ミネルヴァ書房、2005年3月)、40頁参照。

12) 『国語大辞典』(小学館、1988年11月)、342頁。

13) モースは東京帝国大学教授として日本における生物学および動物学発展の基礎を築いた。また横浜から東京に向かう車窓から偶然、「大森貝塚」を発見したことで彼の名前はよく知られている。梅溪昇『お雇い外国人 明治日本の脇役たち』(講談社、2007年2月)参照。

において支配的であった英仏哲学に代わる、その後のドイツ哲学の台頭、流行の端緒をつくり、わが国の国家主義、国粹保存主義の台頭に大きな影響を及ぼした。かれ以後、ブッセ (Ludwig Busse) のロツツェ哲学、ケーベル (Raphael Koeber) のハルトマン、ショーペンハウエルの哲学などが続き、哲学といえはドイツということに定まった観を呈するようになった。]¹⁴⁾

戦前の、とくに旧制高校の学寮ではデカンショ節¹⁵⁾が学生歌としてよく歌われた。学生たちにもドイツ哲学がもてはやされ、よく読まれた。それほどドイツ哲学が日本の学生たちを席卷した時期があったが、その端緒を築いたのがドイツ人でなくアメリカ生まれのお雇い外国人教師・フェノロサであったということは、意外と知られていない。哲学の教授としてのフェノロサの講義を受けて育った一人として、わが国の柔道を確立し講道館を創設した嘉納治五郎が挙げられる。彼も柔道を通して、日本人初の国際オリンピック委員会委員となり、1940年の東京オリンピック招致に成功するなど国際的に活躍した人といえるだろう。

この頃のフェノロサは、先に述べたようにまだ日本美術に関してほとんど知識はなかった。日本の古美術を骨董屋から買っても、価値のないものを購入して騙されることが多かった。こんなとき学生の身分であった天心がフェノロサ教授の通訳として一緒に歩くようになったのである。哲学の教授として迎えられたフェノロサであったが、彼は講義のかたわら日本の美術に興味をもち、日本美術に深い感銘を受け、そのうち本格的に研究に没頭するようになった。彼は狩野家から日本、中国の古画鑑定法を修得し、狩野永探という号をたまわるほどにまで、鑑識眼を身につけるようになっていた。その結果、現在ではボストン美術館の至宝となっている「平治物語絵巻」も手に入れることができた。欧化主義が蔓延し、廃仏毀釈運

14) 梅溪、前掲、166-167頁。

15) いくつか説があるが、兵庫県丹波篠山地方で歌われていた民謡のメロディーに、「デカルト」「カント」「ショーペンハウアー」3人の哲学者の頭文字をとった歌詞をのせて歌うようになった、とする説が最も有力のようである。デカルトだけはフランスの哲学者であるが、この学生歌が歌われていた時代は、ヘーゲルやニーチェのドイツ哲学書もよく読まれた。

動のさなか、日本美術の長所を維持し、国粹保存につとめるよう勧めるとともに、狩野芳崖や橋本雅邦などの日本の伝統的画家の保護を熱心に提言した¹⁶⁾。このフェノロサの鑑識眼のおかげで、重要文化財ともいふべき日本美術の作品の数々が、散逸したりあるいは破壊されたりすることなく、こんにちポストン美術館に所蔵されている。哲学の教授時代のフェノロサの日本美術への傾倒ぶりには並々ならぬものがあった。彼は、「東京大学教授を辞めて文部省美術行政の職に就きたいと考える」¹⁷⁾までになっていた。その理由は奈良法隆寺など古寺を巡礼して、仏像などの古美術を思いぞんぶん鑑賞したいという強い願望があったからである。フェノロサは文部省に籍をおけば、出張令を得て自由に出かけられると考えていた。

天心は明治13年10月、東京大学を卒業して文部省音楽取調掛勤務となった。こうして文部省に入省した天心の最初の仕事は音楽の担当であった。省内に音楽取調掛が設置されたのは、前年の明治12年10月のことであった。省内には、美術をあつかう図画取調掛はまだ設置されていなかった。当時音楽取調掛は音楽学校（のちの東京芸術大学音楽学部）設立の準備に当たっていた。したがって天心はその設立準備の仕事に関わった。お雇い外国人としてメーソン（Luther Whiting Mason, 1818-1896）¹⁸⁾が明治政府に招かれ音楽取調掛にいた。メーソンはその設立準備に当たっていたが、彼の通訳は専ら天心がつとめた。天心はメーソン夫妻とも親しくなり、仕事のみならず個人的な交流を深め、私宅にも招かれるようになった。こんなところにも国際人たる天心の萌芽が見られるだろう。すなわち、まだ一度も外国へ行ったことのない天心が、このメーソン夫妻やフェノロサとの交流を通じて、国際人・岡倉天心の国際性を涵養していったと考えられる。

そうこうしているうちに、明治18年11月には文部省内に図画取調掛が設置され、天心は掛員となった。翌年の明治19年1月にはその主任を命じられた。文部省内での天心の所属替えには大きな意味がある。もし、天心がこのとき新設された図画取調掛に配置換えされていなかったならば、美術

16) 梅溪、前掲、168-169頁参照。

17) 木下、前掲、59頁。

18) 斎藤隆三、前掲、31-33頁参照。

評論家・岡倉天心は生まれなかったかもしれない。この配置換え以降、天心はすでに本人の希望通り文部省内に移っていたフェノロサとともに日本美術に関わる仕事に本格的にとりかかることになったからである。その最初の仕事は恩師フェノロサとともに、約9カ月間欧米に出張することであった。明治19年9月のことである。これが天心にとって初めての海外旅行となった。ときに天心は25歳であった。同時代のはかの国際人、すなわち新渡戸稲造、森鷗外と比較して最も遅い洋行であった。因みに他の二人はそろって22歳のときに日本をあとにしている。新渡戸稲造は東京大学を退学して、ジョンズ・ホプキンス大学に入学し、森鷗外が陸軍省派遣留学生として初めてドイツへ渡ったことはすでに述べた。

天心の出張の目的は、フェノロサとともに美術学校（のちの東京芸術大学美術学部）設立準備のため、欧米の美術教育及び美術情勢を視察してことにあった。天心は大学在学中、フェノロサから日本美術に関する指導は一切受けてこなかったことはすでにふれておいた。天心がフェノロサから日本美術に関して大いに学ぶのは、大学を卒業して文部省にはいつてからのことである。とくに文部省内に図画取調掛が設置されたことが大きな要因となった。フェノロサは本人の希望通り、大学教授を辞して、すでに文部省へ移っていたことはすでに述べておいたが、これが天心を幸運へと導く結果となった。フェノロサは図画取調掛の重要な仕事を任されていた。そのフェノロサのひきで天心は図画取調掛に異動できたのであった。もし天心が音楽取調掛に所属したままであったならば、天心の人生は全く違ったものになっていたであろう。文部省に入省してから天心はすでにフェノロサのお供で奈良・京都の古社寺を歴訪して歩いていた。中でも最も記念すべきできごとは、明治17年5月、天心はフェノロサ、ビゲロー（William Sturgis Bigelow, 1850-1926）¹⁹⁾に同伴して法隆寺を訪ね、初めて秘仏である救世観音像を拝したことであった。これは日本美術史上、記録

19) 彼は、ハーヴァード大学医学部出身で、ボストンの名門富豪の家に生まれた。生涯、世界を旅し美術品の収集三昧の生活を送った人物である。明治15年フェノロサを日本へ紹介したモースと共に来日して、フェノロサ、岡倉天心らと交流を深めた。（木下、前掲、57-58頁参照）。

に残ることである。

このように天心は文部省に入省してから、フェノロサの単なる通訳ではなく、ともに日本各地の寺社を訪ね、あるいは欧米にまで共に旅に出かけフェノロサから多くのことを学んだ。フェノロサのもとで日本美術に関する研鑽を積んだ天心は、のちの東京芸術大学の前身である美術学校の校長となり、日本美術界の重鎮へと歩み始めることになるのである。天心にとってフェノロサとの出会いは、まさに運命的であったといっても過言ではないだろう。

4、天心のターニング・ポイント

岡倉天心の略年譜を通して彼の51年間の生涯を眺めると、いくつかのターニング・ポイントが見られる。その第一番目は、すでに述べたフェノロサとの出会いであった。第二番目以降は明治20年、九鬼周三の母、のちの星崎波津との出会い。第三番目は明治31年、東京美術学校長を辞職したあと、日本美術院の創立。第四番目は明治34年、突然のインドへの旅立ち。第五番目は明治37年、横山大観らと渡米、そしてボストン美術館東洋部の顧問に就任、ということになるろう。

第二番目のターニング・ポイントとなった星崎波津との出会いは、天心のその後の人生をもっとも大きく変えるものとなった。天心と波津とが出会う経緯が分かりやすく紹介されている文献の一節があるのでここに引用したい。

「岡倉天心と九鬼周造とのつながりです。九鬼のお父さんは九鬼隆一という、明治の文部省系の高級官僚で在米公使をやったりした、後には男爵の爵位を得た人です。その九鬼隆一がアメリカに滞在している時に、周造のお母さんの波津（あるいは波津子）が、ちょうど九鬼周造をみごもったところで、奥さんだけ日本へ帰ることになった。岡倉天心がヨーロッパをまわってアメリカに来たのでしょうか、これから日本へ帰るといので、

文部省の先輩にあたる九鬼隆一が、天心に頼んでエスコートしてくれるように、と。そういうことで、一緒の船で日本へ帰った。²⁰⁾」

これがきっかけで二人は恋愛関係に陥り、日本に帰ってもその不倫関係が続いた。欧米出張を終えた天心は、東京美術学校幹事に任じられ、明治23年には東京美術学校校長となった。天心28歳のときであった。このうち天心と波津との関係は大きなスキャンダルとなって、東京美術学校の校長の職を追われることになる。この天心と波津との関係は、当時としては当然のことながらセンセーショナルな出来事であった。この二人の関係を深く考察することはできない。これだけで大きなテーマとなるからである。それに関してはこのテーマを扱った著作²¹⁾を参考にされたい。

第三番目のターニング・ポイントは明治31年、東京美術学校長を辞任に追い込まれ、日本美術院を創立した時期である。美術学校を去らなければならなくなった原因は言うまでもなく、波津とのスキャンダルであった。本稿ではこの経緯を扱うだけの余裕がないので次に移るが、重要なことはこのあと天心がどのような行動をとったかであろう。あのまま校長職にとどまることができれば、おそらく日本美術院の創立はなかったであろう。思えば24歳で文部省国画取調掛の主任を拝命し、フェノロサのもとで美術学校設立の準備に携わり、フェノロサと共に欧米視察までしてきた。28歳で美術学校の校長となり、36歳になるまで美術学校一筋に尽くしてきた。設立準備の頃から数えると十余年の長きにわたり、文字通り手塩にかけてきた学校である。それを去らなければならないとしたら哀惜の念に堪えら

20) 『岡倉天心・研究会』(右文書院、2005年1月)のうち坂部恵「天心と九鬼周造」182-183頁を引用。引用箇所に登場してくる九鬼隆一は、元は天心の文部省における上司であったが、その当時、九鬼は全権大使として米国に駐留していた。天心は欧州一巡の視察のあと米国に立ち寄り、表敬訪問のためにかつての上司である九鬼を訪ねた。そのとき九鬼の妻・波津がちょうど九鬼周造をみごもっていた。九鬼周造は『「いき」の構造』(1930)の著者として著名である。

21) 例えば、松本清張『岡倉天心 その内なる敵』(新潮社、1984年)。大岡信『岡倉天心』(朝日新聞社、1985年)などがある。

れないものがあつたであろう。さらに天心を悲しませたことは、天心が辞任することになって、自分の弟子格の教授たちまでが連袂^{れんべい}辞職をしたことであつた。そのまま留まれるのに、天心と共に辞職するというこれらの教授たちのことが気がかりとなつたのは容易に想像できる。そこで天心は日頃から温めていた構想の実現に急きよ着手する。美術学校はいわば大学である。文系にも理系にも大学の上には大学院があつて、更に深い研究をおこなっている。美術界にもそのような高等機関があればよいというのが、天心の日頃からの持論であつた。美術学校を超えるような研究機関、そして自分とともに辞職した教職員たちを受け入れられるものを設立したいと切望するにいたるのである。この間の消息を明快に述べた文献²²⁾があるので引用する。

「法・文・理・工、大学の上いずれも大学院の設備があつて、大学の課程学習を終つて更に深く究めんとするものために資する。美術界においてもまたその如く、一通り^{ひと}學術と実技の修行を終つて更に奥に入らんとするものためには美術大学院がなくてはならない。それは天心の元来の主張であり持論であつた。これがために案を立てて、文部当局の手に致した^{こうとう}ことさえあつた。それを今は計らずも自ら試みるに恰當の立場に到来したのである。退職の教職員の内には私立美術学校の建設を進言したものもあつたが、それは取らなかつた。」

この引用の一節にもあるとおり、ともに退職した教職員の内には私立の美術学校の設立を進言するものもいた。しかし天心は最初からその提案には耳を傾けなかつたようである。それにはやはり美術学校以上のものを設立して見返してやりたいという気持ちが強かつたからであろう。しかし、実際に着手するとなると大きな困難に直面した。一番大きな問題は設立のための資金であつた。こんなときに心強い大きな援助を申し出てくれた外国人がいた。それはビゲローであつた。彼がボストンから電送で送つ

22) 斎藤隆三、前掲、95頁。

てくれた金額は日本円にして、二万円であった。当時あつては誰もが驚くほどの巨額である。こんなところにも、すでに岡倉天心の国際性の片鱗が垣間見えてくるように思われる。天心はこのあとの人生においても、資金の面で、あるいは日本国内で彼が働くにふさわしいポストに行き詰まったときなど、世界から救いの手が伸びてくるのである。これは彼が築いてきた人脈によるところも大きいようだが、彼のパーソナリティーは初対面の人をも魅了するところがあるようである。これも国際人たるに必要な要素であるといえるだろう。

さて、天心のターニング・ポイントについて第三番目までを考察してきたが、残るターニング・ポイントについての考察は次の機会に譲りたい。ただ論旨の展開上、アウトラインだけでもたどっておくと、明治34年のインドへの旅立ち。これは第4番目のターニング・ポイントであった。突然のインドへの旅立ちの前にも、天心は親しい人たちに行き先も告げず、家出、あるいは出奔をくりかえしている。天心には他人には言えない悩みがあったのだろう。日本美術院の財務状態の悪化やその運営についても、天心は悩みが尽きなかったようである。また一説²³⁾には、九鬼周造の母、波津とのことが最大の要因であった、ともいわれている。いずれにせよ、このような状況の中から天心は日本国外に別天地を求め、忽然と日本をあとにしたのが真相のようである。そうして出かけたインドであっても天心は彼特有の交流を深め、その地で得た人脈はその後、天心のよき協力者となって天心に援助の手を差し伸べている。

おわりに

本稿の冒頭で近代日本の国際人たちは、いかにして国際性を涵養し、世界を舞台にして活躍できるようになったのかという課題を設定しておいた。最後に岡倉天心を念頭に置きながらそれについてふれておきたい。

23) 木下、前掲、229頁参照。

岡倉天心が国際性を発揮して、世界を舞台に活躍できるようになれたのには、いくつかの要因が挙げられるだろう。まず第一に挙げなければならないのは、欧米諸国の人たちとディベートしても困らないだけの語学力があったということであろう。天心はこの語学力のおかげで、フェノロサ教授との縁ができ、彼の信頼できる通訳として奈良・京都などの古寺をはじめ、日本中いたる所を訪ねている。フェノロサに同道して歴訪しているうち、次第に日本美術に関する知識を深めていった。その結果、長じて天心は日本美術研究家の第一人者となった。次いで挙げられる要素は、天心は外国語の語学力だけでなく、ずばぬけた国語・漢籍の力を身につけていたということであろう。天心の場合、父の理解もあって、9歳のとき寺に預けられ住職から『論語』『孟子』などを叩きこまれている。これがのちのち日本人としての自負心を涵養する基因になったと思われる。日本に深い関心のある外国人は、天心のような、自国日本に関して深い知識と誇りを有する日本人を好むように思われる。そのような意味で天心を高く評価して、生涯にわたり天心に協力や援助を惜しまなかった外国人も少なくない。その代表格がビゲローであり、このあとボストンで天心のパトロニック的存在となるガードナー (Isabella Stewart Gardner, 1840-1924) 夫人²⁴⁾であった。これは森鷗外や新渡戸稲造にもいえることである。彼らは共通して、外国の進んだところは自ら取り入れる進取の気性に富んだ人たちであったが、ただ外国のモノマネや、外国におもねることは全くなく、日本の高い精神文化を正しく伝えようとする姿勢をもち続けていた人たちであった。その証左として、たとえば新渡戸稲造の英文の著作『武士道』や、同じく岡倉天心の英文の著作『茶の本』を挙げることができるだろう。

24) 彼女はボストンを代表する大富豪の未亡人で、ヨーロッパ芸術、とくにルネッサンス期の芸術に造詣が深く、個人コレクターとしても世界でもトップクラスであった。主に絵画、彫刻彫像、版画、調度品、陶磁器、ガラスなどを熱心に収集した。ボストン時代の天心とも交流があり、天心のアドバイスを得て、日本の屏風絵、掛け軸、絵画なども購入している。15世紀のベニスの宮殿を彷彿させる彼女の邸宅が、今では美術館となって、彼女のコレクションを展示している。全米でもトップクラスであるボストン美術館とならんで、今ではイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館は、そのユニークさと質の高さにおいてボストンを代表する美術館となっている。

また彼らが有するフロンティア精神に富んだパーソナリティーも忘れてはならないだろう。国内にとどまらず、海外へ積極的に出かけ視野の広い実践的な人間たらんとする姿勢こそ、彼らから学ぶべきことだろう。

今回は天心の生涯のうち前半と呼ぶべきものを中心に考察してきたが、残る後半の部分についての考察は、今後の研究課題としたい。